

## 親子のアタッチメント安定性と育児ストレスの関連

稲塚 葉子

(教育学科准教授)

松浦 ひろみ

(教育学科准教授)

中井 由佳子

(京都こころの相談オフィス)

渡部 みもえ

(神戸大学保健管理センター)

### 問 題

アタッチメントとは、発達早期から養育者と子どもとの間で形成される情緒的関係性を指し、子どもの安心感を育み探索行動を支える上で重要な役割を果たすものである。Bowlby (1969) 以来の研究により、アタッチメントは、子どもが自己と他者を捉える際の枠組みとなり、将来の情緒的安定と対人関係をも左右することが知られている。安定したアタッチメントは、応答的他者への信頼感と自尊感情の基礎となり、安定した親密な対人関係の形成を可能にする。不安定なアタッチメントは、幾つかのサブタイプに分類されるが、それぞれの形で他者への不信や自己価値への不安・混乱をもたらし、結果として、情緒的統制や親密な対人関係の形成・維持を困難にする。更に、親として子育てをする際の子どもへの対応にも影響を及ぼし、子どもへの情緒的応答を妨げることにより、不安定なアタッチメントの世代間伝達が生じがちであるとされている。

従って、子育て支援の場で親子のアタッチメントの安定性を評価し、アタッチメントのタイプに応じた支援を考えていくことが、早期対応として重要であると考えられる。

アタッチメントの特徴を捉える方法として実証研究でよく用いられてきたものとして、乳幼児期を対象とするストレージ・シチュエーション法 (SSP)、成人を対象とするアダルト・アタッチメント・インタビュー (AAI) などが挙げられる (数井, 2012)。これらの従来からのアタッチメントの評価は、訓練を受けた専門家

が実験室や家庭での親子の行動を詳細に観察したり、長時間にわたるインタビューを分析したりする方法で行われてきており、子育て支援の場では、支援者の経験に基づく主観的評価に止まることが多かった。しかし、効果的な支援の方法を検討するためには、何らかの客観的指標を用いることが望ましい。

乳幼児期における SSP 以外の測定法としては、養育者による子どものアタッチメント行動評定尺度 (アタッチメント Q ソート法) (Waters & Deane, 1985) がある。SSP が実験室という特殊な状況における愛着行動を観察するのは異なり、日常場面のアタッチメント行動に基づきその安定性を測定することが特徴である (安治, 1996)。アタッチメント Q ソート法は全 90 項目からなるが、簡便化を目的に 26 項目が抽出された (Howes & Smith, 1995)。この項目を用いて、安治 (1996) はアタッチメント安定性尺度 (以下、AQS 尺度と略記) を作成し、1～6 歳の保育園児をもつ母親を対象に質問紙調査を実施して、アタッチメント行動の発達の变化について検討を行っている。また、親のアタッチメントについては、配偶者や一般他者を対象とする尺度は複数存在するが、親子関係に焦点化したものとしては、絵画物語法による投影的アタッチメント測定法である親子状況ピクチャー (PARS) (久保, 2000) の開発も試みられてきている。

これらの方法は比較的簡便で、回答する養育者にとって心理的負荷が少ないという利点がある。しかし、PARS については未だ標準化が不

十分であり、AQS尺度についても、特に低年齢の子どもをもつ専業主婦家庭の親子のデータが不足しているのが現状である。幼稚園入園までは母親が主たる養育者として全面的に育児に携わる専業主婦家庭と、母親が就労している保育園児の家庭では、母親の育児に対する負担感や育児不安感も異なってくると言われている(八重樫・小河, 2002)。安治(1996)の研究時から時間的経過もあり、子育てや母子関係に関する社会通念の変化も考慮せねばならない。

筆者らは、大学院附属の心理相談室で就園前の子どもとその母親を対象とする「子育て教室」を長年に渡り運営し、主に専業主婦家庭の母子を対象とした子育て支援を行ってきた(松浦・稲塚, 2011)。その過程において、アタッチメントの視点から親子の関係性を整理し、親子への支援の可能性について検討を行ってきた(稲塚・松浦, 2013; 松浦・稲塚, 2013; 2015)が、統計的な検討は不十分なままにとどまっている。前述したように、子育て支援の場において、アタッチメントの安定性を評価する基準となる客観的な指標があれば、より効果的な支援方法の検討につながると考えられる。そのためには、専業主婦家庭を対象に含む層のAQS尺度やPARSの標準データを新たに収集することが必要である。

そこで本研究では、アタッチメントの個人差が明確になってくる1～3歳児をもつ養育者を対象に、親子それぞれのアタッチメントの安定性と育児ストレスについて調べる質問紙調査を実施した。目的は、以下の2点である。

- ① 専業主婦家庭を含む調査協力者を対象に、AQS尺度の標準データを収集し、先行研究のデータとの比較検討を行う。
- ② 育児感情との関連からAQS尺度の妥当性について検討する。

## 方 法

- 1) 調査対象 近畿圏のA市およびB市在住の1～3歳児をもつ養育者計557名。
- 2) 調査時期 2015年8～11月
- 3) 手続き

- ① 保健所が実施する乳幼児健診の待ち時間、および子どもセンターでの自由時間に質問への回答を依頼し、終了時に回収する方法。

- ② 乳幼児健診時に配布、依頼を行い、後日郵送にて回収する方法。

上記の2種類の方法で調査への協力を依頼した。有効回答者は全体で453名、回収率は81.3%であった。所要時間は10分程度であった。

## 4) 質問紙の構成

- ① フェイスシート：対象児の性別、年齢、出生順位、保育所・幼稚園通園の有無、回答者の性別、年齢、続柄、就労状況、世帯構成、主たる養育者、育児協力・支援者、有効な子育て支援サービスについて尋ねた。

- ② AQS尺度(安治, 1996)

以下の4つの下位尺度で構成される。

〈安全基地〉 養育者への近接を維持しようとする行動、周囲への探索行動の合間に養育者への近接を繰り返す行動など探索のための安全基地として養育者を利用する行動。

〈接近・接触〉 養育者との身体的接触を求めまたそれを喜んで受容する行動。

〈従順〉 養育者の要求や制止、注意に沿った従順な行動。

〈不信・回避〉 自分の要求がすぐに実現されないときに養育者を信頼して待つことや我慢することができない、養育者に対するネガティブな情動(例えば、怒りなど)の制御がうまくできないといった養育者への信頼感の欠如を表す行動。他者からの働きかけに対する社会的反応性が低く、他者を回避する行動。(以下、〈接近接触〉〈不信回避〉と表記する。)

対象児の日常の様子について、「1.あてはまらない」～「5.あてはまる」の5段階で回答を求めた。

- ③ 育児感情尺度(荒牧・無藤, 2008)

以下の3下位尺度を用いた。

〈負担感〉 子どもが自分の思い通りに行動しないことに対するいら立ちなどの負担感。

〈不安感〉 自分の育て方に関する不安など育児をめぐる不安感。

〈肯定感〉 子どもを育てることに意義や自身の

成長を感じるなど育児をめぐる肯定感。

「a.まったくない」～「d.よくある」の4段階で回答を求めた。

#### ④ PARS (久保, 2000)

④に関しては、実施に要する時間を考慮し、一部対象者のみに実施した。また、結果については本論では取り扱わず、別途検討を行う。

#### 5) 倫理的配慮

研究目的についてインフォームドコンセントを行い、了承を得た上で実施した。調査は無記名で行い、回収ボックスを用意し、回答が他者の目に触れないよう留意した。また、回収した質問紙は厳重に保管し、研究終了後適切に処分した。

## 結 果

### 1. 調査結果

#### 1) 対象者の属性

回答者が母親以外のケースが少数であったため、回答者が母親である計443名のデータを分析に用いた。いずれも主たる養育者に母親が含まれている。

対象者の内訳は、子どもの年齢が1歳代147名(男児78名, 女児69名, 平均月齢19.8ヶ月,  $SD=0.94$ ), 2歳代124名(男児63名, 女児61名, 平均月齢29.7ヶ月,  $SD=1.81$ ), 3歳代172名(男児89名, 女児83名, 平均月齢41.7ヶ月,  $SD=1.52$ )であった。

母親の年齢は、平均年齢33.8歳で、20歳代74名(16.7%), 30歳代301名(67.9%), 40歳代59名(13.3%), 無記入9名(2%)であった。就労状況は、専業主婦222名(50.1%), フルタイム勤務105名(23.7%), 育児休業中43名(9.7%), パートタイム勤務69名(15.6%), 無記入4名(0.9%)であり、全体の半数が専業主婦であった。

世帯構成は、核家族375名(84.7%), 3世代同居46名(10.4%), その他10名(2.3%), 無記入2名(0.5%)で、全体の約85%が核家族であった。

#### 2) AQS 尺度の得点化と年齢差・性差の検討

「あてはまらない」を1点～「あてはまる」

を5点として得点化し、AQS全体および各下位尺度の1項目当たりの得点を算出した。全対象者の平均値と標準偏差は、AQS全体3.52点( $SD=.355$ ), 〈安全基地〉3.19点( $SD=.718$ ), 〈接近接触〉4.33点( $SD=.486$ ), 〈従順〉3.66点( $SD=.603$ ), 〈不信回避〉3.05点( $SD=.602$ )である。得点が高いほど安定したアタッチメント行動が見られると考えられる。また、AQS全体得点が3.0点以上であれば、子どものアタッチメントが安定傾向にあるとされる(数井・遠藤, 2005)。本研究の対象者の内392名(88.5%)が3.0点以上, 51名(11.5%)が3.0点未満であった。

信頼性の検討を行ったところ、AQS全体は $\alpha=.676$ , 〈安全基地〉は $\alpha=.734$ , 〈接近接触〉は $\alpha=.630$ , 〈従順〉は $\alpha=.633$ , 〈不信回避〉は $\alpha=.468$ であった。信頼性係数は低いが、本研究では先行研究とのAQSの得点比較を行うため、安治(1996)の因子構成を用いて以下の分析を行った。

次に、年齢段階および性別によりAQSの得点に差が見られるかを検討するために、年齢段階と性別を独立変数、AQS全体得点および各下位尺度得点をそれぞれ従属変数とする2要因の分散分析を行った。AQS全体得点については、年齢要因の主効果( $F(2,416)=6.44, p<.01$ )が認められた。Tukey法による多重比較の結果、1歳が2歳、3歳より有意に得点が高いことが分かった。性別の主効果および交互作用は、有意ではなかった。(以下、多重比較はTukey法により行った。)〈安全基地〉および〈従順〉については、年齢の主効果のみが有意であり(順に、 $F(2,432)=9.64, p<.001$ ;  $F(2,430)=6.95, p<.001$ ), 1歳が2歳、3歳より高かった。〈接近接触〉, 〈不信回避〉については、主効果、交互作用のいずれも有意ではなかった。【表1】

#### 3) AQS の得点の先行研究との比較

安治(1996)では、保育園児(1歳～6歳)を対象に、年齢段階別にAQSの各尺度得点を合計点で算出し、アタッチメント行動の発達の变化について検討を行っている。本研究の結果

表 1. AQS 尺度（全体および因子別）における年齢段階別、性別の記述統計量

		1 歳代			2 歳代			3 歳代			全体	
		男児	女児	全体	男児	女児	全体	男児	女児	全体	男児	女児
AQS 全体	<i>n</i>	73	67	140	61	58	119	84	79	163	218	204
	<i>M</i>	3.61	3.60	3.61	3.48	3.48	3.48	3.44	3.50	3.47	3.51	3.53
	<i>SD</i>	(.28)	(.37)	(.32)	(.38)	(.37)	(.37)	(.33)	(.36)	(.34)	(.33)	(.37)
安全基地	<i>n</i>	76	68	144	62	61	123	88	83	171	226	212
	<i>M</i>	3.41	3.36	3.39	3.15	3.17	3.16	2.97	3.11	3.04	3.17	3.21
	<i>SD</i>	(.59)	(.74)	(.67)	(.69)	(.63)	(.66)	(.70)	(.80)	(.75)	(.69)	(.74)
接近接触	<i>n</i>	76	68	144	62	59	121	87	81	168	225	208
	<i>M</i>	4.39	4.37	4.38	4.28	4.28	4.28	4.31	4.35	4.33	4.33	4.34
	<i>SD</i>	(.43)	(.50)	(.47)	(.51)	(.50)	(.50)	(.43)	(.53)	(.48)	(.45)	(.51)
従順	<i>n</i>	77	69	146	63	60	123	86	81	167	226	210
	<i>M</i>	3.79	3.83	3.81	3.55	3.59	3.57	3.53	3.66	3.59	3.62	3.69
	<i>SD</i>	(.51)	(.58)	(.54)	(.59)	(.66)	(.63)	(.61)	(.59)	(.60)	(.58)	(.61)
不信回避	<i>n</i>	77	69	146	62	61	123	88	83	171	227	213
	<i>M</i>	3.14	3.09	3.12	2.97	3.06	3.02	2.97	3.08	3.02	3.03	3.08
	<i>SD</i>	(.64)	(.54)	(.59)	(.70)	(.53)	(.62)	(.60)	(.56)	(.58)	(.65)	(.54)

について、安治（1996）と比較を行い、その異同を検討するために、各尺度項目の合計点を算出した。その上で、先行研究と本研究を独立変数、各尺度の合計点を従属変数とし、年齢段階ごとに *t* 検定を行った。【表 2】

その結果、1 歳代の〈接近接触〉( $t(211) = -2.13$ )、1 歳代の〈従順〉( $t(213) = -2.09$ )、2 歳代の〈従順〉( $t(266) = 2.08$ )、2 歳代の〈不信回避〉( $t(266) = 2.54$ )、3 歳代の〈不信回避〉( $t(384) = 3.26$ ) の得点に有意な差が認められた。以上の結果から、先行研究と比較し、本研究の対象者は、1 歳代では〈接近接触〉と〈従順〉が高い、2 歳代では〈従順〉と〈不信回避〉が低い、3 歳代では〈不信回避〉が低いことが示された。

安治（1996）の調査対象者は保育園児のみである。先行研究との得点の違いが対象児の就園状況によるものであるのか、それとも親子の関係性そのものの変化を反映しているのかについて検討する必要がある。そこで、本研究の対象児について、独立変数を年齢および就園状況（保育園児／保育園児以外）、従属変数を AQS

全体得点および各下位尺度得点として、それぞれ 2 要因の分散分析を行った。保育園児以外には、未就園児と幼稚園児が該当する。

その結果、いずれにおいても就園状況の有意な主効果、交互作用は認められなかった。よって、就園状況により AQS 得点に有意な差はないといえる。

#### 4) アタッチメントの安定性と育児感情の関連についての検討

まず、育児感情尺度について、「全くない」を 1 点～「よくある」を 4 点として得点化し、下位尺度の 1 項目当たりの得点を算出した。信頼性の検討を行ったところ、〈負担感〉 $\alpha = .793$ 、〈不安感〉 $\alpha = .791$ 、〈肯定感〉 $\alpha = .717$ で、各下位尺度の信頼性が確認された。

アタッチメントの安定性および年齢段階により育児感情に差が見られるかを検討するために、以下の手順で分析を行った。まず、AQS 全体について、平均値  $\pm 1SD$  を基準に、H (High) 群・M (Middle) 群・L (Low) 群の 3 群に分類した。H 群はアタッチメントの安定性が高い群、L 群は低い群、M 群は中間群となる。

表 2. 年齢別の AQS 各尺度得点の先行研究との比較

			N	平均値	(SD)	t 値(df)	
安全基地	1 歳代	先行研究	70	24.1	(4.29)	0.494 (212)	n.s.
		本研究	144	23.7	(4.69)		
	2 歳代	先行研究	146	23.1	(4.16)	1.74 (267)	n.s.
		本研究	123	22.1	(4.66)		
	3 歳代	先行研究	216	21.5	(4.55)	0.358 (385)	n.s.
		本研究	171	21.3	(5.29)		
接近接触	1 歳代	先行研究	70	25.4	(2.98)	-2.134 (212)	$p < .05$
		本研究	144	26.3	(2.83)		
	2 歳代	先行研究	146	26.0	(2.75)	0.926 (265)	n.s.
		本研究	121	25.7	(3.04)		
	3 歳代	先行研究	216	25.7	(3.14)	-1.024 (382)	n.s.
		本研究	168	25.9	(2.88)		
従順	1 歳代	先行研究	70	21.7	(3.82)	-2.091 (214)	$p < .05$
		本研究	146	22.8	(3.29)		
	2 歳代	先行研究	146	22.4	(3.34)	2.087 (267)	$p < .05$
		本研究	123	21.5	(3.78)		
	3 歳代	先行研究	216	21.7	(3.60)	0.454 (381)	n.s.
		本研究	167	21.6	(3.64)		
不信回避	1 歳代	先行研究	70	18.9	(3.48)	0.328 (214)	n.s.
		本研究	146	18.7	(3.58)		
	2 歳代	先行研究	146	19.2	(3.10)	2.548 (267)	$p < .05$
		本研究	123	18.1	(3.10)		
	3 歳代	先行研究	216	19.3	(3.10)	3.268 (385)	$p < .05$
		本研究	171	18.2	(3.10)		

AQS 全体 3 群と年齢段階を独立変数，育児感情（負担感・不安感・肯定感）をそれぞれ従属変数とする 2 要因の分散分析を行った。その結果，負担感については，AQS 3 群の主効果が有意傾向 ( $F(2,433) = 2.65, p < .10$ )，年齢の主効果が有意 ( $F(2,433) = 7.68, p < .001$ ) であり，L 群が H 群より負担感が高い傾向にあり，2 歳が 3 歳・1 歳より負担感が高かった。不安感については，年齢の主効果が有意 ( $F(2,432) = 3.50, p < .05$ ) で，2 歳が 1 歳より不安感が高かった。肯定感については，AQS 3 群の主効果が有意 ( $F(2,418) = 4.50, p < .05$ ) であり，H 群が M 群・L 群より肯定感が高かった。【表 3】

同様に〈安全基地〉，〈接近接触〉，〈従順〉，〈不信回避〉についても，平均値  $\pm 1SD$  を基準に，H 群・M 群・L 群に分類し，AQS 3 群と年齢を独立変数，育児感情を従属変数とする 2 要因の分散分析を行った。

〈安全基地〉：負担感については，〈安全基地〉3 群の主効果が有意傾向 ( $F(2,433) = 2.45, p < .10$ )，年齢の主効果が有意 ( $F(2,433) = 10.08, p < .001$ ) であり，〈安全基地〉3 群と年齢の交互作用も有意であった ( $F(2,433) = 2.51, p < .05$ )。年齢段階における〈安全基地〉3 群の単純主効果の検定の結果，2 歳において〈安全基地〉3 群の単純主効果が有意であり ( $F$

(2,433) = 5.22,  $p < .01$ ), L群がM群, H群より負担感が高かった。一方, 〈安全基地〉3群における年齢段階の単純主効果は, L群とM群において有意であり(順に  $F(2,433) = 9.02, p < .001$ ;  $F(2,433) = 3.22, p < .05$ ), L群では, 2歳が, 3歳, 1歳より高かった。M群では, 2歳が1歳より高かった。不安感については, 年齢の主効果が有意傾向 ( $F(2,432) = 2.98, p < .10$ ) で, 2歳が1歳より不安感が高い傾向であった。肯定感については, 〈安全基地〉3群の主効果が有意 ( $F(2,432) = 4.50, p < .05$ ) で, H群がM群・L群より高かった。【表4】

〈接近接触〉: 負担感については, 〈接近接触〉3群の主効果が有意傾向 ( $F(2,433) = 2.77, p < .10$ ), 年齢の主効果が有意 ( $F(2,433) = 10.35, p < .001$ ) で, L群がH群より負担感が高い傾向にあり, 2歳が3歳・1歳より高かった。不安感については, 年齢の主効果が有意 ( $F(2,432) = 4.38, p < .05$ ) で, 2歳が1歳より高かった。肯定感については, 〈接近接触〉3群

の主効果が有意傾向 ( $F(2,418) = 2.87, p < .10$ ) で, H群がL群より高い傾向であった。【表5】

〈従順〉: 負担感については, 〈従順〉3群の主効果が有意 ( $F(2,433) = 6.72, p < .001$ ), 年齢の主効果が有意 ( $F(2,433) = 7.63, p < .001$ ) であり, L群がM群・H群より高く, 2歳が3歳・1歳より高かった。不安感については, 〈従順〉3群の主効果が有意 ( $F(2,432) = 4.12, p < .05$ ) で, L群がH群より高かった。肯定感については, 〈従順〉3群の主効果が有意 ( $F(2,418) = 6.26, p < .01$ ) で, H群・M群がL群より高かった。【表6】

〈不信回避〉: 負担感については, 〈不信回避〉3群の主効果が有意 ( $F(2,433) = 3.52, p < .05$ ), 年齢の主効果が有意 ( $F(2,433) = 6.22, p < .01$ ) であり, L群がH群より高く, 2歳が3歳・1歳より高かった。不安感については, 〈不信回避〉3群の主効果が有意 ( $F(2,432) = 6.56, p < .01$ ) であり, 〈不信回避〉3群と年齢の交互作用も有意傾向であった ( $F(2,432) = 2.37, p$

表3. 年齢段階とAQS3群における育児感情得点の記述統計量

	1歳代				2歳代				3歳代				全体			
	H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群	
負担感	<i>n</i>	30	104	12	146	23	79	22	124	24	115	33	172	77	298	67
	<i>M</i>	2.03	2.14	2.20	2.12	2.39	2.31	2.55	2.36	2.09	2.22	2.33	2.22	2.16	2.21	2.38
	<i>SD</i>	(.59)	(.45)	(.51)	(.49)	(.53)	(.51)	(.54)	(.52)	(.41)	(.45)	(.52)	(.46)	(.54)	(.47)	(.53)
不安感	<i>n</i>	30	104	12	146	23	78	22	123	24	115	33	172	77	297	67
	<i>M</i>	2.38	2.52	2.25	2.47	2.73	2.65	2.62	2.66	2.58	2.60	2.40	2.56	2.55	2.59	2.44
	<i>SD</i>	(.70)	(.67)	(.57)	(.67)	(.63)	(.76)	(.60)	(.71)	(.67)	(.57)	(.81)	(.64)	(.68)	(.66)	(.71)
肯定感	<i>n</i>	28	97	12	137	23	77	22	122	24	111	33	168	75	285	67
	<i>M</i>	3.42	3.29	3.43	3.33	3.50	3.22	3.20	3.27	3.40	3.24	3.09	3.23	3.44	3.25	3.19
	<i>SD</i>	(.44)	(.49)	(.38)	(.47)	(.50)	(.40)	(.52)	(.458)	(.38)	(.57)	(.56)	(.55)	(.44)	(.50)	(.53)

表4. 年齢段階と安全基地3群における育児感情得点の記述統計量

	1歳代				2歳代				3歳代				全体			
	H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群	
負担感	<i>n</i>	31	100	15	146	20	86	18	124	24	111	37	172	75	297	70
	<i>M</i>	2.17	2.13	1.98	2.12	2.30	2.31	2.71	2.36	2.13	2.19	2.38	2.22	2.19	2.20	2.38
	<i>SD</i>	(.51)	(.48)	(.54)	(.49)	(.52)	(.50)	(.56)	(.52)	(.50)	(.44)	(.48)	(.46)	(.51)	(.47)	(.56)
不安感	<i>n</i>	31	100	15	146	20	85	18	123	24	111	37	172	75	296	70
	<i>M</i>	2.58	2.42	2.57	2.47	2.80	2.59	2.87	2.66	2.55	2.60	2.44	2.56	2.63	2.54	2.58
	<i>SD</i>	(.78)	(.64)	(.64)	(.67)	(.64)	(.74)	(.60)	(.71)	(.65)	(.63)	(.68)	(.64)	(.70)	(.67)	(.67)
肯定感	<i>n</i>	30	92	15	137	20	84	18	122	24	107	37	168	74	283	70
	<i>M</i>	3.35	3.31	3.36	3.33	3.47	3.23	3.22	3.27	3.27	3.26	3.14	3.23	3.36	3.27	3.21
	<i>SD</i>	(.49)	(.47)	(.47)	(.47)	(.50)	(.42)	(.50)	(.45)	(.74)	(.50)	(.55)	(.55)	(.58)	(.47)	(.52)

<.10)。年齢段階における〈不信回避〉3群の単純主効果の検定の結果、2歳、3歳における〈不信回避〉3群の単純主効果が有意であり(順に $F(2,432) = 3.66, p < .05$ ;  $F(2,432) = 6.27, p < .01$ )、2歳、3歳共に、L群・M群がH群より不安感が高かった。一方、〈不信回避〉3群における年齢段階の単純主効果は、L群において有意であり( $F(2,432) = 3.95, p < .05$ )、2歳・3歳は1歳より不安感が高かった。肯定感

については、〈不信回避〉3群の主効果が有意( $F(2,418) = 6.80, p < .001$ )で、H群がM群・L群より肯定感が高かった。【表7】

2. 考察

(1) AQS 尺度得点について

今回の調査では、調査協力者の約半数が専業主婦であった。これまでデータが少なかった専業主婦家庭を含む1歳代～3歳代のAQSの基

表5. 年齢段階と接近接触3群における育児感情得点の記述統計量

		1歳代				2歳代				3歳代				全体		
		H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群
負担感	<i>n</i>	34	85	27	146	23	71	30	124	35	102	35	172	92	258	92
	<i>M</i>	1.94	2.16	2.22	2.12	2.47	2.28	2.50	2.36	2.21	2.19	2.32	2.22	2.17	2.21	2.35
	<i>SD</i>	(.52)	(.49)	(.40)	(.49)	(.57)	(.49)	(.53)	(.52)	(.54)	(.40)	(.54)	(.46)	(.58)	(.46)	(.51)
不安感	<i>n</i>	34	85	27	146	23	70	30	123	35	102	35	172	92	257	92
	<i>M</i>	2.34	2.50	2.55	2.47	2.92	2.54	2.74	2.66	2.50	2.54	2.68	2.56	2.55	2.53	2.66
	<i>SD</i>	(.71)	(.68)	(.59)	(.67)	(.58)	(.72)	(.72)	(.71)	(.76)	(.60)	(.62)	(.64)	(.73)	(.66)	(.64)
肯定感	<i>n</i>	32	79	26	137	22	71	29	122	35	100	33	168	89	250	88
	<i>M</i>	3.46	3.29	3.28	3.33	3.25	3.39	3.12	3.27	3.34	3.24	3.10	3.23	3.36	3.28	3.16
	<i>SD</i>	(.48)	(.48)	(.42)	(.47)	(.52)	(.39)	(.52)	(.45)	(.64)	(.48)	(.64)	(.55)	(.56)	(.46)	(.54)

表6. 年齢段階と従順3群における育児感情得点の記述統計量

		1歳代				2歳代				3歳代				全体		
		H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群
負担感	<i>n</i>	35	98	13	146	18	77	29	124	22	119	31	172	75	294	73
	<i>M</i>	2.02	2.14	2.21	2.12	2.26	2.27	2.68	2.36	2.02	2.23	2.33	2.22	2.08	2.21	2.45
	<i>SD</i>	(.55)	(.46)	(.50)	(.49)	(.56)	(.47)	(.52)	(.52)	(.55)	(.44)	(.45)	(.46)	(.55)	(.46)	(.52)
不安感	<i>n</i>	35	98	13	146	18	76	29	123	22	119	31	172	75	293	73
	<i>M</i>	2.20	2.55	2.61	2.47	2.50	2.62	2.87	2.66	2.46	2.55	2.68	2.56	2.35	2.57	2.74
	<i>SD</i>	(.68)	(.68)	(.42)	(.67)	(.67)	(.72)	(.69)	(.71)	(.76)	(.59)	(.73)	(.64)	(.71)	(.65)	(.67)
肯定感	<i>n</i>	33	91	13	137	18	76	28	122	22	116	30	168	73	283	71
	<i>M</i>	3.40	3.32	3.19	3.33	3.58	3.24	3.15	3.27	3.27	3.29	2.99	3.23	3.40	3.29	3.09
	<i>SD</i>	(.52)	(.45)	(.51)	(.47)	(.49)	(.44)	(.40)	(.45)	(.74)	(.48)	(.61)	(.55)	(.59)	(.46)	(.51)

表7. 年齢段階と不信回避3群における育児感情得点の記述統計量

		1歳代				2歳代				3歳代				全体		
		H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群	全体	H群	M群	L群
負担感	<i>n</i>	32	97	17	146	20	86	18	124	28	117	27	172	80	300	62
	<i>M</i>	2.10	2.13	2.12	2.12	2.15	2.36	2.65	2.36	2.14	2.23	2.28	2.22	2.12	2.23	2.34
	<i>SD</i>	(.40)	(.49)	(.66)	(.49)	(.51)	(.50)	(.55)	(.52)	(.52)	(.46)	(.43)	(.46)	(.46)	(.49)	(.57)
不安感	<i>n</i>	32	97	17	146	20	85	18	123	28	117	27	172	80	299	62
	<i>M</i>	2.44	2.51	2.27	2.47	2.31	2.70	2.85	2.66	2.17	2.61	2.76	2.56	2.32	2.60	2.65
	<i>SD</i>	(.75)	(.64)	(.68)	(.67)	(.81)	(.65)	(.76)	(.71)	(.68)	(.63)	(.49)	(.64)	(.74)	(.64)	(.67)
肯定感	<i>n</i>	31	90	16	137	20	85	17	122	28	114	26	168	79	289	59
	<i>M</i>	3.47	3.28	3.31	3.33	3.55	3.21	3.23	3.27	3.37	3.25	3.00	3.23	3.45	3.25	3.15
	<i>SD</i>	(.37)	(.50)	(.47)	(.47)	(.51)	(.41)	(.48)	(.45)	(.61)	(.53)	(.51)	(.55)	(.50)	(.49)	(.50)

礎データが得られたことは意義がある。

年齢段階および性別による AQS 得点の違いについて検討したところ、以下の点が明らかになった。① AQS 全体得点は、1歳が、2歳、3歳より高い。② 〈安全基地〉は、1歳が2歳、3歳より高く、〈従順〉は、1歳が3歳、2歳より高い。③ 〈接近接触〉〈不信回避〉については、年齢差は認められない。④ AQS 得点に性差は認められない。

〈安全基地〉行動が、年齢が上がるにつれて減少すること、〈接近接触〉〈不信回避〉行動が1～3歳代では有意な差がみられないこと、AQS 得点に概ね性差が認められないことに関しては、安治(1996)と同様の結果が示された。〈従順〉に関しては、安治(1996)では1～3歳に差がなかったが、本研究では、1歳代が2歳、3歳代より高く、異なる結果が示された。また、各尺度得点を安治(1996)と比較すると、本研究の対象者は、1歳代で〈接近接触〉〈従順〉が高いこと、2歳代で〈従順〉〈不信回避〉が低いこと、3歳代で〈不信回避〉が低いことが明らかになった。すなわち、1歳代では、親との身体接触を求め、それを喜び、親の注意や制止に対して従順である傾向が強い。しかし、自我発達により子どもの自己主張が強くなる2～3歳の時期には、親の欲求や制止、注意に沿った従順な行動をとらない、あるいは子どもの情緒的耐性が低いと母親が認識する傾向が強いことが分かる。

本研究の保育園児と保育園児以外では、AQS の得点に差は認められなかったため、上記の特徴は、対象児の属性の違いによるものではないといえる。影響が考えられる他の要因として、先行研究から20年が経過していることが挙げられる。すなわち、20年前に比べ2～3歳の時期の母子関係における葛藤が強くなっていることを示唆する結果であり興味深い。きょうだい構成の変化(少子化)に伴う母子の密着化などの要因が関連していると思われるが、この点について明確にするには、より詳細な検討が必要である。

## (2) 育児感情との関連からみたアタッチメントの安定性について

まず、AQS 全体得点および各尺度得点について、アタッチメントの安定性が高い群は低い群より、育児の負担感が低いことが明らかになった。また、〈安全基地〉を除き、安定性が高い群は低い群より、育児の肯定感が高いことが示された。この結果は、育児感情との関連でみた場合の AQS 尺度の妥当性を確認するものである。また、年齢段階と育児感情の関連については、育児負担感、2歳代が、3歳代・1歳代より高く、育児不安感、2歳代が、1歳代より高いことが示され、先行研究(間・関根・室, 2000)を支持するものである。

次に、アタッチメントの各側面が育児感情に及ぼす影響の異同について述べる。負担感に関しては、4下位尺度のいずれも、アタッチメントの安定性が高い群が低い群より育児の負担感が低いことが明らかになった。また、〈安全基地〉においては、次のような特徴が示された。まず、1歳代・3歳代では、アタッチメントの安定性により負担感に差はないものの、2歳代では、L群の負担感がM群・H群より顕著に高い。また、H群・M群では年齢により負担感に差は認められないものの、L群に着目すると、年齢により負担感が異なり、2歳代が、3歳代、1歳代より負担感が高い。すなわち、2歳代のL群が、特に負担感が高いといえる。〈安全基地〉L群とは、外界探索のための安全基地として親の元に戻る行動が少ないと親が認識するグループである。〈安全基地〉行動が全体として多い1歳代では、親の元に戻る行動が少ないことは負担増にはならず、自立が進んでいく3歳代では、〈安全基地〉行動の少なさは成長に伴う自然なものを受けとられやすいと考えられる。一方、活動性も自己主張も高まる2歳代では、〈安全基地〉行動の少なさが、親の元からの飛び出しの行為と感じられて、親の負担感を高めると考えられる。

育児の不安感に関しては、アタッチメント行動の側面により影響性が異なることが明らかになった。〈安全基地〉〈接近接触〉については、



アタッチメントの安定性と不安感との間に関連は見られない。一方、〈従順〉〈不信回避〉については、アタッチメントの安定性が高い程不安感が低いことが示された。

育児不安感とは、他の母親との比較や、メディアの育児情報にふれることを通して喚起される「自分の育て方でよいのか」という不安や育児に対する自信のなさを指す。親の制止や注意に沿った行動を子どもがとらず、聞き分けがよくないこと、自分の欲求が通らない時のネガティブ情動のコントロールが難しいこと等が、育児不安を高める要因となると考えられる。

また、〈不信回避〉に関しては、1歳代では〈不信回避〉行動の多少は育児不安感に影響しないものの、2歳、3歳代になるとL群とM群の育児不安感が、H群に比べて高くなることが示された。子どもの自己主張が強まる2歳・3歳代は、躰をはじめとして、親が子どもの行動を制止・コントロールする必要性が高まる時期であり、親子間の情緒的葛藤が生じやすいと考えられる。2歳、3歳代のM群に着目すると、負担感についてはH群と差がないものの、不安感にはL群と同様に、H群より高いことが示された。すなわち、〈不信回避〉行動は、2歳、3歳代の子どもをもつ多くの母親にとり、自分の育児の仕方についての不安に結びつきやすいことがわかる。また、〈不信回避〉L群に着目すると、1歳代では、負担感・不安感ともに他群と同様に低いものの、2歳代では、負担感・不安感ともに高くなり、不安感の高さは3歳代まで共通することが示された。

〈不信回避〉が、2歳・3歳代において特に不安感に影響するという結果は、アタッチメントの観点から育児への支援を考える際に、示唆を与えるものである。〈不信回避〉は、不安定なアタッチメントの中でも、特にアンビバレント型の行動特徴を多く含む。AQS尺度の各因子とアタッチメントタイプとの関連については確認できてはいないため推測の域を出ないが、アンビバレント型の子どもの親に適した支援の方法を考える際に、親の育児に対する自信のなさや不安感に着目するなど、支援への手がかり

として活かせると考えられる。

### (3) まとめと今後の課題

本研究では、専業主婦家庭を含むAQS尺度の基礎データを得ることができた。また、育児感情との関連においてその妥当性が検証され、AQSの得点を用いて、アタッチメントの安定性をスクリーニング的に評価する可能性が示された。

最後に、今後の課題について述べる。第一点目として、AQSの得点に影響を与える要因についてのより詳細な検討が必要である。その際、AQS得点が特に低い群や特に高い群について、家族状況や育児のサポート状況等にどのような特徴があるのかについて精査していく必要がある。第二点目として、育児支援の現場において、アタッチメントの安定性を高めるための支援方法を工夫していくことが挙げられる。その際、本研究のデータを基準として、より客観的に支援の効果を検証していくことが必要である。第三点目として、AQS尺度は親が子どもの行動評定を行うため、親の側の要因により評価が歪む可能性についても考慮する必要がある。親のアタッチメントの測定を意図するPARSの分析結果を補完的に用いて、総合的に検討していく必要がある。

### 引用文献

- 荒牧美佐子・無藤隆 2008 育児への負担感・不安感・肯定感とその関連要因の違い：未就学児を持つ母親を対象に。発達心理学研究, 19(2), 87-97.
- 安治陽子 1996 幼児期における愛着の組織化と社会的適応—漸成的組織化は可能か—。東京大学大学院教育学研究科修士論文。
- Bowlby, J. 1969/1982 Attachment and loss, Vol.1: Attachment. New York: Basic Books. (黒田実郎・大羽繁・岡田洋子・黒田聖一(訳) 1991 新版 母子関係の理論I：愛着行動。岩崎学術出版社。)
- Howes, C. & Smith, E. W. 1995 Children and their child care caregivers: Profiles of relationship. Social Development, 4, 44-61.
- 稲塚葉子・松浦ひろみ 2013 「子育て教室」における心理的支援(1)—安定したアタッチメントの母子に対する関わり—。日本心理臨床学会第32回大会発表論文集, 237.

- 数井みゆき 2012 アタッチメントの実践と応用—医療・福祉・教育・司法現場からの報告—, 誠信書房.
- 数井みゆき・遠藤利彦 2005 アタッチメント(愛着)障害と測定尺度の作成. 平成14年度～平成16年度科学研究費補助金研究成果報告書 心的外傷経験が行動と情動に与える影響について:乳児院群と家庭群の比較(研究代表者:数井みゆき), 13-35.
- 久保恵 2000 愛着表象の投影法的研究—親子状況刺激画を用いて—. 心理学研究, 70, 477-484.
- 間三千夫・関根剛・室みどり 2000 児の年齢階層別に見た母親の育児不安 信愛紀要, 40, 41-48.
- 松浦ひろみ・稲塚葉子 2013 「子育て教室」参加者のアタッチメントの安定性と心理的支援 京都女子大学発達教育学部紀要, 11, 63-70.
- 松浦ひろみ・稲塚葉子 2013 「子育て教室」における心理的支援(2)—不安定なアタッチメントの母子に対する関わり—. 日本心理臨床学会第32回大会発表論文集, 238.
- 松浦ひろみ・稲塚葉子 2011 心理相談室における子育て支援—「子育て教室」の9年間の実践から—. 京都女子大学大学院こころの相談室心理臨床研究, 5, 3-11.
- 八重樫牧子・小河孝則 2002 母親の子育て不安と母親の就労形態との関連性に関する研究. 川崎医療福祉学会誌, 12, 219-239.